

## 大名時計博物館

児玉 寛嗣

下町、谷中界限にはいくつもの小さな博物館がある。そのひとつである大名時計博物館を訪れた。それは小高い丘の上の閑静な屋敷町の一郭にある。門柱に「大名時計博物館」とある門をくぐり、雑草が生い茂る庭の飛び石を進んだ先になんの変哲のない民家のような建物が現れる。それが博物館だ。入ると静けさのなかで時を刻む音がひときわ大きく聞こえる。といつてもその音は大名時計のものではない。展示されている時計は動いてない。展示物は谷中の陶芸家・上口愚朗のコレクションがベースだ。この人はもともと高級紳士服の仕立屋をしていたが、陶芸の世界に入り、大名お抱えの時計師が製作した時計の収集を趣味にしていたという変わり者。氏の没後、彼の子供が博物館を作り開館し今日に至っている。

日本に機械式の時計が入ってきたのはザビエルが来日した頃のことである。一般の庶民が寺の鐘で時刻を知った江戸時代に大名は特権として時計を持っていたようだ。時計には文字盤はない。代わりに「子」から始まって「戌」で終わる十二支の文字が書かれたリングとその内側に円盤がある。円盤の回転角度により二時間単位で時を知ることができた。

当時は、夜明けから日暮れまでの昼を六等分、日暮れから夜明けまでの夜を六等分して時刻を表示する不定時法をとっていた。そのため、季節によって夜明け時間と日暮れ時間が変わるので昼と夜で一時の長さも変わった。時計の円盤を昼夜同じ速度で動かしたら、時間が合わなくなるので、昼と夜の円盤の速度を調整する役目の人がいたそうだ。

「子」は午前零時をさして、正子と呼んでいた。正子から始まって、八つ、七つ、日の出（明け六つ）、五つ、四つ、正午、八つ、七つ、日の入り（暮六つ）、五つ、四つ、で正子に戻った。ちなみに、朝の四つにとるお茶を四つと言った。正午の午は「うま」である。昼の御菓子時間は八つ、おやつ語源でもある。

展示物だけでなくその傍の解説書に学びのある一日だった。